

Amadeus Chorus
5th CONCERT
84.30 Sep.
Tokyo Cathedral

アマデウス合唱団 第5回定期演奏会

Wolfgang Amadeus Mozart

REQUIEM

■演奏者プロフィール

黒岩 英臣 <指揮>

Hideomi Kuroiwa

1960年、桐朋学園大学指揮科入学、故斎藤秀雄氏に師事。1964年、同大学弦楽オーケストラのアメリカ公演に指揮者として同行、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコ等で指揮した。1965年同大学卒業、NHKテレビ「今年のホープ」に出演。同年修道士となり、1975年まで修道生活を送った。

1976年より再び音楽に専念。札幌交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団の定期演奏会をはじめ、東京の主要オーケストラとの共演も数多く行っており、今後の活躍が期待されている。1981年9月より九州交響楽団常任指揮者を務める。

原田 泉 <ソプラノ>

Izumi Harada

東京芸術大学卒業、同大学院独唱科修了。バッハのカンタータ、ペルゴレージの宗教曲、モーツァルトの「レクイエム」「戴冠ミサ」、シューベルトのミサ、ベートーヴェンの第九など、様々なコンサートにソリストとして出演している。オペラでは、プッチーニの「ボエーム」、ペルゴレージの「奥様になった女中」に出演している。日本コロムビア(株)専属。

阪口 直子 <アルト>

Naoko Sakaguchi

武蔵野音楽大学卒業、芸大大学院独唱科終了。芸大定期演奏会のヴェルディの「レクイエム」、バッハの「ロ短調ミサ」に出演している。またベートーベンの第九、モーツァルトの「戴冠ミサ」やコンサートアリア、メンデルスゾーンの詩篇など様々なコンサートにソリストとして出演している。59年度文化放送音楽賞に入賞。

佐藤 淳一 <テノール>

Junichi Sato

東京芸術大学卒業。バッハのカンタータ等を中心に、数多くの宗教曲のコンサートにソリストとして出演している。オペラでは、「フィガロの結婚」「ラ・ボエーム」創作オペラ「女の城」等に出演している。芸大大学院独唱科在学中。

砂田 直規 <バス>

Naoki Sunada

信州大学卒業、東京混声合唱団(4年間)、東京芸術大学大学院オペラ科修了。オペラでは芸大オペラ「修禅寺物語」<夜叉王>をデビューに「椿姫」<ジェルモン>、「袈裟と盛遠」<盛遠>、「あた」<広海屋>など主要な役を次々とこなしている。またコンサート、宗教音楽、合唱指揮などのステージも多く、活動の場は広い。

小林 英之 <オルガン>

Hideyuki Kobayashi

東京芸術大学でオルガンを秋元道雄、広野嗣雄の各氏に師事し、1978年に同大学卒業。その後西ドイツ・フランクフルト国立音楽大学でオルガンを、エドガー・クラップ氏に学ぶ。1981年同大学卒業。1982年東京芸術大学大学院を卒業。

東京アマデウス管弦楽団

Amadeus Orchester Tokyo

1973年、指揮者玉置勝彦氏の門下生とその友人達で結成された。これまでモーツァルト、シューベルト、ブラームス、ブルックナーの交響曲等を中心として、年2回の定期演奏会のほか、協奏曲や合唱曲の伴奏、音楽教室を対象とした演奏など、多彩な活動を行なっている。ほかにもシンガポールの演奏旅行、静岡県オペラ協会の「椿姫」などで好評を博した。一昨年10月31日に第20回記念として、ベートーヴェンの交響曲第9番を演奏している。本年7月、第1回野辺山音楽祭に出演。

鈴木 優 <合唱指導>

Masaru Suzuki

1982年東京芸術大学を卒業。1982年4月から本年3月まで東京混声合唱団に在団する。1981年より、当合唱団の合唱指導を務めている。

PART I

モーツァルト/ミサ・ブレヴィス ニ長調

W. A. Mozart/MISSA BREVIS D-dur(K.194)

PART II

モーツァルト/レクイエム

W. A. Mozart/REQUIEM(K.626)

1. ミサ・ブレヴィス ニ長調

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791)はその生涯において、オペラ、種々の楽器のための協奏曲、室内楽、交響曲から、祝宴のための音楽やダンスのための音楽など、およそモーツァルトの時代に在りえた音楽の、あらゆるジャンルにわたってかけがえのない名曲を残しています。宗教音楽の分野においても、十数曲のミサ曲や数々の正に珠玉であるモテットなどの小品、更にヴェスペレなどが残されており、それらは現代の合唱団の貴重なレパートリーであり、また実際の典礼で用いられ、更には音楽を愛好する人々の耳や精神を楽ませているわけです。

最近では、単に後期の大作だけでなく、初期のいわゆる『ザルツブルグ時代』の作品も注目を集め、さかんに演奏されたり、またレコード化もされ、かなりの曲を実際に聴くことができるようになりました。

本日演奏するニ長調のミサ(K.194)も、それらの初期の傑作のひとつで、1774年8月8日、モーツァルト生涯半ばである18歳の時の作品です。モーツァルトの生まれたザルツブルグは、その当時はローマ教会領であり、領主はローマ教会より任せられる大司教職の貴族が務めるといって、非常にカトリックとの関わりの強い土地でした。モーツァルトは、ヨーロッパの大都市を各地演奏旅行した少年時代の後、1772年から1781年までの間、父であるレオポルド・モーツァルトがそうであったように、大司教に仕える官任音楽家となりました。

K.194をはじめとして、ザルツブルグ時代のミサの共通の特色は、その『短さ』にあると思われます。これは、当時大司教であったヒエロニムス・コロレドがミサの司式に長い時間をかけることを好まず、大きなミサでも全体で45分を超えることを許さなかったという事情によるものです。この大司教コロレドとモーツァルトは非常に険悪な関係が続き、1781年にはついに決定的な亀裂が生じ、それ以後モーツァルトはザルツブルグから離れ、ウィーンに定住することとなるわけです。

K.194は、カトリックのミサ通常文であるキリエ、グロリア、クレド、サンクトゥス、ベネディクトゥス、アニュス・デイの6つの部分からなります。これらの6章は、実際の典礼では、本日の演奏会形式と異なり、連続して歌われるものではありません。(演奏時間約20分)

2. レクイエム

コロレド大司教の下から決別し、ウィーンに定住するようになったモーツァルトは、わずらわしい拘束から逃れた反面、経済的保証を失い、その後は自立した音楽家として、作曲、演奏、レッスンによって生計を立てていくこととなり、晩年には多額の借金を抱えるようになったわけです。

1781年にウィーンに出てきてから、没する1791年までの10年間にモーツァルトが作曲した宗教音楽は、ハ短調ミサ(K.427)、アヴェ・ヴェルム・コルプス(K.618)、そしてレクイエム(K.626)のわずか3曲です。しかも、そのうちハ短調ミサとレクイエムは未完の作品です。それにも関わらず、これらの作品が音楽史上ひととき高くそびえ立つものであることは、周知のことと存じます。

モーツァルトは、1791年12月5日未明、レクイエムの作曲半ばで、完成を見ることなく世を去ったわけですが、すでに依頼者から半金を受け取っており、また妻であったコンスタンツェも残金を回収するという現実的な事情から、何とかレクイエムを完成した形にする必要が生じました。コンスタンツェは、この補筆完成の仕事を、最初に、アイブラーという後にウィーンの宮廷楽長にもなる作曲家に依頼しましたが、彼は、わずかな補筆のみでこの仕事を放棄し、次に、モーツァルトの弟子で当時25才のジェスマイヤーが引き継ぎ、翌年完成を見ることとなります。

ジェスマイヤーは、死期が近づいているのを悟ったモーツァルトから、レクイエム完成のための指示を与えられていた、と伝えられていますが、それがどの程度のものであったのかは知ることができません。しかし、手稿譜の研究により、モーツァ

ルトの自筆の部分と、ジェスマイヤーの補筆による部分は、明確に区別することができます。まず、レクイエムとキリエはすべてモーツァルトの手によるものであり、それに対し、サンクトゥス、ベネディクトゥス、アニユス・デイはジェスマイヤーの手によるもの、最後のコンムニオは、歌詩をつけ変えてレクイエムとキリエを再現しています。その他の曲では、大体、声楽部と低音の動きのほとんど、前奏や間奏の第一ヴァイオリンのモチーフや管弦楽のソロ的な動きが、モーツァルトによって残され、その他大部分の管楽器パートや、弦の内声部などのオーケストレーションが、ジェスマイヤーによってなされています。

ジェスマイヤーの補筆に関しては、以前より賛否両論あるところで、モーツァルトの響きの世界から逸脱したものであるという見解や、一応の満足を与える形で完結させた功績は評価されるべきであるなど議論が続いています。最近では、よりモーツァルトの様式に接近しようという方向の下に、バイヤー等の音楽学者による新しい補筆版も現われています。本日の演奏では最も一版的であるモーツァルト・ジェスマイヤー版を使用いたしました。

レクイエムは、モーツァルト最後の作品であり、その死によって未完の作品となり、また、その作曲の依頼者が正体不明であったことなどから、様々なエピソードや伝説に彩られています。

すが、その代表的なものとして、没する年の9月に、モーツァルトが「フィガロ」の台本作者であるダ・ポンテに宛てた手紙をここに引用したいと思います。

「私の頭は混乱しています。私は話しをするのもやっとなのです。あの見知らぬ男の姿が目の前から追い払えないのです。いつでも私はその姿を見えています。彼は懇願し、急ぎ立て、せっかちにも私に作品を求めます。私も作曲をつづけています。休んでいるよりも作曲しているときのほうが疲れないのです。それ以外、私には怖れるものとしてないのです。私には最後の時が鳴っているように思えます。私は自分の才能を十二分に楽しむ前に終りに辿りついてしまいました。でも人生はなんと美しくかったことでしょう。生涯は幸福の前兆のもとにはじまったのでした。でも、人は自分の運命を変えることはできません。人はだれでも自分の生涯を割りふることはできないのです。摂理の望むことがおこなわれるのを甘受しなければならぬのです。筆を擱きます。これは私の葬送の歌です。未完成のまま残しておくわけにはいきません」

この手紙はイタリア語で書かれ、後世の人による疑作であるとも見られています。その当時のモーツァルトの精神状態を十分にうかがい知ることができるとおもいます。

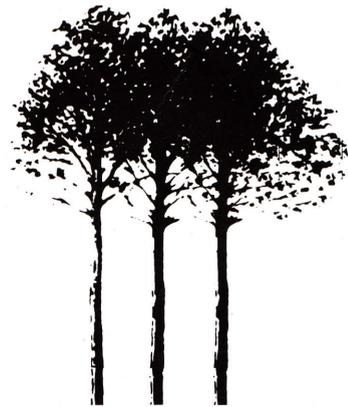
(演奏時間約55分)

Amadeus Chorus

- 1981 February **Mozart:REQUIEM**
- 1981 November **Händel :MESSIAH**
- 1982 November **Fauré :REQUIEM**
- 1983 September **Mozart:KRÖNUNGS MESSE**
- 1984 September **Mozart:REQUIEM**

「自分達の手でモーツァルトのレクイエムを」と集まったのが40名。モーツァルトのミドルネーム「アマデウス（神に愛される者）」の名を頂き、'80年4月に当合唱団は誕生いたしました。初舞台は翌年2月15日、石橋メモリアルホールにて、念願のモーツァルト「レクイエム」。同年11月1日、ヘンデル「メサイア」、'82年フォーレ「レクイエム」、昨年モーツァルト「戴冠ミサ」と4回の演奏会を経て、今日に至っております。第5回定演を迎えるにあたり、私達にとって忘れることのできないモーツァルトの「レクイエム」を再びとりあげることにいたしました。4年前の演奏会では、未熟ながらも熱気あふれる演奏と評されましたが、今回は気持ちを新たに「未熟ながらも」という甘えを排し、一年間練習に取り組んで参りました。

現在団員は60名。16才の高校生から70才の円熟ミセスまで、出身地も北海道から九州まで、そして様々な職業etc. バラエテ



イーに富んだ仲間が、週一回の練習、月一回の日曜練習、さらに年2回の合宿を通して、より良い音楽を、そして私達アマデウスならではの味を、と練習に励んでおります。当団の歴史はまだ始まったばかりで、取り組むべき課題は山ほどありますが、発足当時のチャレンジ精神を忘れることなく「ゆるりと猛進」の心意気、大きく成長してゆきたいと思っております。

尚、これまで早稲田を拠点として活動して参りました私達と、古くから目黒を中心に活躍されている合唱団が、相方ともに全く同名のアマデウス合唱団であることが判りました。懸念される諸々の不都合を避けるため、関係方々とも御相談の結果、当団は1984年10月1日から東京アマデウス合唱団と改称させていただきましたことになりました。

皆様には今後とも一層の御支援をいただきたく、団員一同心からお願い申し上げます。

